

國學院大學學術情報リポジトリ

『ウェールズ旅行記』に見られるギラルドゥス・カンブレンシスの政治的スタンス

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 永井, 一郎 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001037

『ウェールズ旅行記』に見られる ギラルドゥス・カンブレンシスの政治的スタンス

■ 永井 一郎

▶ 要 旨

『ウェールズ旅行記』の主題は1188年にウェールズで行われた第3回十字軍参加勸奨巡行である。カンタベリー大司教ボードウィンが主導し、著者ギラルドゥス・カンブレンシスが案内役を務めている。

本稿の目的は、上記の巡行から『ウェールズ旅行記』の執筆時期にかけてギラルドゥスがイングランド王宮に対する政治的スタンスをどのように変えたか、同書の記述から探ることにある。著作の主題とかけ離れた課題設定であるが、同書には彼の心境や思考を直接、間接に伝える記述がかなり含まれており、そこから彼のスタンスやその変化を推定できる。

本稿は同書から3種の事項を取り上げて検討した。

- (1) 1188年の巡行に対するギラルドゥスの態度と評価。これは、巡行を計画し、ボードウィンを送り出したヘンリ二世に対する評価につながる。
- (2) ヘンリ二世に対する評価。これは、『ウェールズ旅行記』の執筆時におけるギラルドゥスの政治的スタンスを反映している可能性が高い。
- (3) セント・デイヴィズ教会の大司教座権回復に関するギラルドゥスの見通し。これは、彼が数年後に展開したイングランド王宮との戦いを『ウェールズ旅行記』の執筆時点でどれだけ具体的に構想していたかを示す。

(1) から (3) の推定結果を連ねてみると、1188年から1197年の間にギラルドゥスがイングランド王宮に対する評価をはっきりと変え、批判を強めていたこと、しかし、王宮と争う覚悟はまだ固めていなかったことが分かる。

▶ キーワード

ギラルドゥス・カンブレンシス 『ウェールズ旅行記』 ヘンリ二世 十字軍参加勸奨 カンタベリー大司教ボードウィン

目次

- I はじめに
- II 十字軍参加勸奨巡行とギラルドゥス
- III ヘンリ二世に対する評価

I はじめに

中世ウェールズを代表する聖職の文筆家ギラルドゥス・カンブレシス（Giraldus Cambrensis, 本名 Giraldus de Barri, 1145/6～1222/3）は、その著作『ウェールズ旅行記（Itinerarium Kambriae）』⁽¹⁾を構想・執筆していた時期にどのような政治的スタンスをもっていたのか、本稿はこの点を探索するひとつの試みである。手掛かりとする史料はもっぱらこの著作の記述である。

まず『ウェールズ旅行記』について簡単に説明する。

中心的テーマは、1188 年春にカンタベリー大司教ボードウィン（Baldwin）が第 3 回十字軍参加勸奨のためウェールズを一周した巡行である。ギラルドゥスはこれに参加し、大司教の案内役を務めながら、各地で熱心に勸奨の説教を行った。ただし、同書は単なる巡行の記録ではなく、これを枠組みとしながら各巡行先にまつわる多様なエピソードを紹介している。後者の多くはウェールズをよく知るギラルドゥスが訪問先で記憶から引き出したり、住民から聞き取ったものである。彼はこうしたエピソードの追加で巡行の記録がより充実したものになると考えていたのであろう。

ギラルドゥスが「ウェールズ旅行記」の構想を得たのは巡行中、それも早い段階であったと思われる。最初の訪問地から巡行の様子やその地にまつわる事柄が具体的に記されており、著述に役立つ事項を現地でメモ風にでも書き留めていたと推定されるからである。執筆は巡行後まもなく、おそらく 1188 年後半に始められ、完成したのは 1191 年である。その後第 2 版が 1197 年に、第 3 版が 1214 年に作られている⁽²⁾。断続的にはあるが、ギラルドゥスはこの著作に 25 年近くかかわっていたことになる。

『ウェールズ旅行記』は、『アイルランド地誌（Topographia Hibernica）』⁽³⁾、『アイルランド征服（Expugnatio Hibernica）』⁽⁴⁾に続くギラルドゥスの第 3 作であり、彼が残した多くに著作の中でもっともよく知られている。今日でも中世ウェールズに多少とも関心のある人ならば皆一度は目を通してしている。続いて書かれた『ウェールズ案内（Descriptio Kambriae）』⁽⁵⁾が、ウェールズ人・社会の低い文明度を誇張したり、ウェールズを征服・統治する方法を提案するなどウェールズ人にとって承服しがたい記述を多く含んでいるのに対し⁽⁶⁾、『ウェールズ旅行記』にはそうしたいわば不愉快な記述はない。12 世紀末のウ

(2)

ウェールズ各地の様子が十字軍勸奨巡行の記録とともに順次紹介されており、現在のウェールズを知る者はそれと対比しながら往時をしのぶことができる。

他方、中世ウェールズ史の研究者にとってこの著作は豊かな情報源となっている。第1に、ウェールズにおける十字軍勸奨の状況が具体的に分かり、同様な記録がほかにないので、貴重な史料である。第2に、訪問先の地域で当時よく知られていたと推定される事件や伝承の紹介が重要である。こうした記述は他の文献にはない多くの情報を含んでおり、中世ウェールズ社会に関心をもつ研究者にとって貴重な資料となる。また、文筆家としての才能は発揮しやすい題材なのであろう、生き生きとした叙述になっている。第3の情報は、巡行先のウェールズ人支配者たちに関するものである。ギラルドゥスは訪問した地域の支配者が自分たちをどのように迎え入れたのか記しており、それが当時のウェールズ人側の政治状況を推測する手掛かりとして利用されている。

私は以上とは違う視点から『ウェールズ旅行記』を読みたいと考えている。すなわち、記述内容そのものよりも、著者ギラルドゥスがこの当時もっていた思考ないし思惑を探り、そこから彼がとっていた政治的スタンスはどのようなものであったか、また、そのスタンスは前後の時期に比べてどのように変化しているか検討するのである。ただし、ひとつの著作とはいえ、そこに含まれている著者の思考をすべて検討することは不可能であるから、何か視点を設定しておく必要がある。彼の政治的スタンスが最も探りやすく、量も多いのは12世紀後半に南ウェールズで対峙していた2大勢力の統率者、すなわち、イングランド勢力を率いていたヘンリ二世とウェールズ人勢力をまとめていたリース・アップ・グリフィズ（Rhys ap Gruffydd）に関する記述である。ただし、紙幅に制約があるので、本稿はヘンリ二世に対する評価を中心にイングランド王宮に対する姿勢を検討対象とし、リースとその背後のウェールズ人社会に対する評価は続稿で取り上げることにした。

リースは形の上でヘンリ二世を主君とし、その意向に従う姿勢を示す一方で、チャンスがあれば南ウェールズ全体の支配権を奪回したいと考えていた。1180年代後半の南ウェールズは、比較的安定した政治状況を享受していたが、それは両者のいずれかに大きな状況変化があり、力のバランスが崩れれば容易に崩れるものであった⁽⁷⁾。

このように南ウェールズにおいて2つの勢力が対立していることをギラルドゥスはよく知っていた。それも第三者的にではなく、自分のこととして熟知していた。というのも、彼は生来イングランド勢力とウェールズ人勢力の双方に根差していたからである。すなわち、彼は南ウェールズに侵入、定着したアングロ・ノルマン貴族の血統と同地域の古い王家につながる血統を併せもっていた。対峙する2つの勢力の間に立ってどのような政治的スタンスを採るかは、彼にとって避けて通ることのできない、また、生涯を左右する大きな問題であった⁽⁸⁾。

『ウェールズ旅行記』においてもギラルドゥスの政治的スタンスが重要であったことは、執筆に当たって彼が想定していた読者を推測すると具体的に理解できる。

この著作は先行する2作と同様に特に読者を限定せず、広く有識者に向けて書かれた形になっているが、現実には彼が読者と目していた人々がいたはずで、献呈先がこの点について示唆を与えてくれる。

上記のようにラルドゥスは3つの版を作っているが、献呈先は版によって変えている。第1版はエリー司教ウィリアム・ド・ロンシャン (William de Longchamp)、第2版はリンカーン司教ヒュー (Hugh)、第3版はカンタベリー大司教スティーヴン・ラングトン (Stephen Langton) に贈られている⁽⁹⁾。『アイルランド地誌』と『アイルランド征服』の第1版がそれぞれヘンリ二世と息子のリチャードに捧げられているのに比べて、『ウェールズ旅行記』の献呈先はいわば格が落ちているが、ギラルドゥスは自著の献呈先が重ならないように配慮したうえで、各版の作成時に王宮で力をもっていた人物を選んだのであろう⁽¹⁰⁾。いずれにせよ、彼がまず想定していた読者は王宮に集う人々であり、その中心にヘンリ二世がいた。彼はヘンリ二世に対する評価を王の側近たちに提示しているのであって、その評価は著者と読者の双方にとって政治的な意味をもつ。くわえて、この当時ギラルドゥスはヘンリ二世に直接仕え、その愛顧を望んでいたから、執筆に際して特別の配慮をしたと考えるのが自然である。とすれば、そうした配慮がうかがわれる記述から彼のイングランド勢力に対する政治的スタンスを探り出すことができる。

くわえて、『ウェールズ旅行記』の場合は、ウェールズにも読者、あるいは、関心をもつ人々がいたと想定される。ボードウィンらの巡行はウェールズ各地の支配者たちにとって記憶に残る事件だったはずで、彼らは巡行の記録が書かれたと聞き知った時に、自分たちの行動や地域がどのように表現され、評価されているか興味をもったであろう。実際、後述のように、聖職者の中に大司教の巡行を危険視する人々もいた⁽¹¹⁾。当時のウェールズ人支配者たちの中でラテン語の『ウェールズ旅行記』を読める人は少数の聖職者に限られていたであろうが、セント・デイヴィズ教会には何人かいたと考えるのが自然であり、そうした人々は著者が同僚であることも手伝って、同書に接する機会があったと考えてよい⁽¹²⁾。当然、ギラルドゥスはこの点をよく承知していたはずで、『ウェールズ旅行記』は周囲の聖職者や世俗支配者たちの関心を集めることを前提として執筆が進められた可能性が高い。彼は、イングランド王宮の人々と同様に、聖・俗のウェールズ人支配者たちの反応も予測しながら、取り上げる事項やその表現に注意を払っていたのではなかろうか。とすれば、これは次稿の作業となるが、ウェールズ人、特に支配者たちに関する記述からギラルドゥスの政治的スタンスを引き出すことができる。

私はこれまで数年間ギラルドゥスの政治的スタンスについて検討を重ねてきた。本稿も

その一部である。そこで、先行拙稿と本稿がどのように関係しているか簡単に説明しておこう。

出発点はギラルドゥスが第4作『ウェールズ案内』でなぜ相反する提案をしているのかという疑問、すなわち、一方でウェールズを完全征服する戦略をイングランド王に提示し、他方でウェールズ支配者たちに対してイングランド王権の支配から脱して独立する方法を説いているのか、という問題である⁽¹³⁾。

私はこれまで3つの方向からこの問題に取り組んできた。

第1はギラルドゥスが当時のウェールズの政治状況、特にイングランド勢力とウェールズ人勢力との対立関係をどこまで具体的に知っていたのか探る作業で、上記のように彼が十分な知識をもっていたことが確認された⁽¹⁴⁾。南西ウェールズ生まれの彼にとって故郷にかかわる状況であるから当然であるが、彼の記述の信ぴょう性にかかわってこの点の確認は重要である。

第2は『自叙伝 (De Rebus a se Gestis)』を中心とする著作から彼の生涯を追う試みで、この作業の中から次の仮説が浮かび上がっていった。

ギラルドゥスは上記のようにイングランド勢力とウェールズ人勢力にまたがる二元的出自をもち、これを生かして両勢力の仲介役を務めていたが、生涯の目標と定めたセント・デイヴィズ司教就任をヘンリ二世によって阻止されたのがきっかけとなり、政治的スタンスを親イングランド方向に大きく変えた。特に王宮付き司祭としてヘンリ二世に仕える中で、自分が王の忠実かつ有能な従者であることを誇示し、王の愛顧を得て、司教への途をひらこうとした⁽¹⁵⁾。しかし、ヘンリ二世はこれに応えぬままに死去し、ギラルドゥスは新しい政治的スタンスを選ぶ必要に迫られた。この作業は秘かに進められ、数年後に表面化した。「セント・デイヴィズ問題」、すなわち、同教会の大司教座権と司教選定手続きをめぐる王宮に戦いを挑んだ事件である。ここで彼はそれまでとは逆の反イングランド的スタンスを鮮明にしている⁽¹⁶⁾。

第3は、上記の仮説をこの時期に書かれたギラルドゥスの著作によって検証する作業である。ただし、いずれの著作も彼の政治的スタンスをテーマとしているわけではないから、記述の行間から、あるいは、暗示的な表現から彼の秘かな意図を読み取る必要がある。

『アイルランド地誌』と『アイルランド征服』はギラルドゥスが王宮でヘンリ二世に仕えながら執筆したもので、この時期にふさわしく王を称えて明確に親イングランド的姿勢を示している。ここまでは2つの先行拙稿で確認済みである⁽¹⁷⁾。

続いて本稿が取り上げるのは、『ウェールズ旅行記』が構想され、執筆された時期であるが、この時期のギラルドゥスは先行2著作の時期より複雑な状況に置かれていた。最も重要な違いは、同書の執筆が始まった時点ではヘンリ二世が存命中であったが、完成時に

は死去していたことである。彼にとってヘンリ二世は後ろ盾としても、説得すべき相手としても大きな意味をもっていたから、王の死去は彼が政治的スタンスを変えるきっかけになる可能性が高い。では、どの方向にスタンスが変わり、それは『ウェールズ旅行記』の中でどのように表現されているか。

検討は2つの時期、すなわち、ヘンリ二世の存命中と死後に分けて行う。『ウェールズ旅行記』に執筆に要したのが3年弱であることを考えると、時期区分をしてもどれだけ記述の変化が確認できるのかという疑問も生じるが、第2、第3版まで視野に入れると検討対象となる期間は25年となる。私は試みる価値があると判断した。

時期区分を本稿の構成として表現すると次のようになる。第2節は巡行中のギラルドゥスの活動を採りあげ、その政治的意味を検討しながら彼のスタンスを推定する。第3節はヘンリ二世を直接評価している記述を紹介し、それが王の死によって変化していないか探ってみる。第4節で取りあげるのは、王の死後ギラルドゥスが立てようとしていた新しい戦略にかかわることで、数年後に彼が新戦略の中軸に据えたセント・デイヴィズ教会大司教座権の問題をこの時点で彼がどのように扱っているか紹介し、その政治的意味を検討する。

私は、第1節から第3節へと検討を進める中で、ギラルドゥスが『ウェールズ旅行記』の執筆中に政治的スタンスをどのように変えていったのか明らかにできるのではないかと期待している。

最後に『ウェールズ旅行記』のマニュスクリプトと校本について簡単に説明しておこう。ギラルドゥスは3つの版をつくったが、第1版のマニュスクリプトは3点、第2版と第3版はそれぞれ2点残されている。ただし、いずれもオリジナル、すなわち、献呈先に贈られたものではない⁽¹⁸⁾。

本稿が利用するのはディモック (Dimock, J. F.) の校本で、150年も前に出版されたものであるが今日でも広く使われている。ディモックは、ギラルドゥスが第1版から第3版まで順次改訂したことを重視して、著者の意図を最もよく伝えているのは最終版であると判断したので、底本に第3版で最も欠落などの問題が少ないマニュスクリプト (ディモックの記号でD) を選び、これに第1、第2版のいわば異文を注記するという方法を採用した⁽¹⁹⁾。その結果、ディモックの校本は第3版の内容を知るのは容易であるが、本稿のように『ウェールズ旅行記』執筆時期のギラルドゥスを探る場合には、校本の中から第1版の文章を取り出す必要がある。これはかなり煩雑な作業となるが、幸いなことに、ディモックの校本をソープ (Thorpe, L.) が英訳していて、その末尾に第2、第3版の追加部分が英訳でまとめられている⁽²⁰⁾。本稿はこの英訳を手掛かりとしてディモックの校本から追加部分を削除し、第1版の内容を確認する方法を採用した。そのうえで第2、第3版に

重要な異文が含まれている場合には、これを第1版と比較検討している。

Ⅱ 十字軍参加勸奨巡行とギラルドゥス

ギラルドゥスが大司教ボードウインの率いる巡行を先導し、熱心に参加勸奨の説教を行ったことは第1節で紹介した。本節は彼がこの巡行にどのような意図ないし思惑をもって臨んだか検討し、そこから彼がもっていた政治的スタンスを推測する。

こうした課題設定は無意味、あるいは、不必要に見えるかもしれない。ギラルドゥスは巡行に積極的にかかわり、率先して十字軍参加を申し出たのだから、当然巡行を高く評価し、巡行を命じたヘンリ二世の意図に賛成していた、したがって、王に近いスタンスを採っていたと判断できる。そう考えれば、検討するまでもなく結論は出ていることになる。

しかし、ギラルドゥスの置かれた状況はこれほど単純ではなかった。以下で紹介するが、当時の南ウェールズの状況から判断して彼は自分の二元的出自がもつメリットを失うリスクを冒して巡行を先導していた可能性が高い。私は彼が心中に複雑な思いを抱えながら王に命じられた仕事を進めていたのではないかと考えている。なぜそう推測するのか、この点を『ウェールズ旅行記』に記述に基づき検討、確認するのが本節の目的である。

なお、彼は十字軍と巡行そのものは当然視していたためであろう、巡行を直接評価している記述はない。そこで、本節では彼自身を含めた巡行関係者の行動などいわば間接的な記述を取り上げ、そこから彼の評価を推定する場合が多くなる。

記述の検討を始める前に、いくつか準備的作業をしておこう。

第1は、この時期にウェールズで十字軍参加勸奨の巡行が行われることになった経緯である。

1169年にエジプトを制圧してアイユーブ朝を開いたサラーフディーンはパレスチナからキリスト教徒を排除する努力を重ねていたが、1187年7月にハッティンの戦いで十字軍を打ち破り、エルサレムを占拠した。これを知ったローマ教皇グレゴリウス八世は聖地奪回のために新たな十字軍を編成するよう西欧の主要な支配者たちに呼びかけた。第3回十字軍である。ヘンリ二世はフランス王フィリップ二世と戦いの最中であつたが、教皇の要請に応じて停戦し、国内各地で十字軍のため資金（「サラディン税」）と戦士を集めるよう命じた。その一環として、ウェールズでは1188年春に十字軍参加勸奨の巡行が行われたのである。

なお、ヘンリ二世は国内外の問題に追われていたこともあって、十字軍に参加すること

なく1189年に死去し、実際に参加したのは次の王リチャード一世である。王は1191年に第2陣の軍勢を率いて地中海を渡り、エルサレムをめぐるサラフディーンと激しく戦ったが奪回できず、大きな成果なく帰国した。

第2は、ウェールズ巡行はどのように企画されたのか、なぜカンタベリー大司教ボードウィンの中軸として編成されたかという問題である。『ウェールズ旅行記』は一行が国境を越えてウェールズに到着したところから始まっていて、出発までにどのような手配がなされたのか記していない。したがって明確な根拠を欠いたままではあるが、私は次のように推測している。

教皇の要請を受けたヘンリ二世は王国から派遣する十字軍の編成を計画し、その一環としてウェールズでは戦士を募ることにした。これまでの経験から王は、ウェールズには実戦能力の高い戦士たちが多数いることを知っていた。問題は誰を参加勧奨の責任者にするかである。ウェールズ各地の司教に勧奨させるという方法もあったと思われるが、ヘンリ二世は王国最高位のカンタベリー大司教にこの仕事を委ねた。それだけウェールズにおける戦士の徴募が重要視されたとも言えるが、むしろ私は王が十字軍とは無関係な政治意図をもっていたためではないか考えている。すなわち、大司教をウェールズ各地の司教座教会に派遣することによって同地の教会が全体としてカンタベリー大司教の管理下にあることを人々に顕示しようとしたのである。これはイングランド王権がこれまで進めてきたウェールズ聖界支配の仕上げという意味をもっていた⁽²¹⁾。背景にある状況を少し説明しておこう。

イングランド王権は12世紀初頭からウェールズ各地に遠征し、その領域を拡大していたが、征服地を軍事・政治面だけでなく宗教面からも統治しようとした。すなわち、司教選出が行われるたびに干渉して、王に忠実な聖職者を送り込み、12世紀中葉までに次のような司教選定のルールを作り上げていた⁽²²⁾。①司教座教会の参事会が、予め王宮の意向を打診したうえで複数の司教候補を推挙する。②王はその候補の中から次期司教を選任する。③選任された司教にカンタベリー大司教が聖別を与え、その際自分への忠誠を誓わせる。

このルールを確認するためにカンタベリー大司教がウェールズ各地の教会、特に司教座教会を訪れ、大司教主宰のミサを行うことによって、ウェールズの教会が全体としてカンタベリー教会の支配下に、したがって、イングランド王権の下にあることを誇示する、これがウェールズ巡行に託された暗黙の目的だった。

第3は、ウェールズに住む人々、特にウェールズ人支配者たちがボードウィンの巡行をどのように受け止めたかという問題である。ここでも巡行以前にさかのぼって、ウェールズ人支配者たちがイングランド王権の教会支配にどう対応してきたか説明する必要がある。

当然のことながら、ウェールズの教会はイングランド王権の政策を進んで受け入れたわけではない。ウェールズでは、司教が死去したら後任者はその教会のメンバーによって選出され、ウェールズの他の司教によって聖別されるという古い慣習ができていた⁽²³⁾。彼らにとって、王権が押し付けてきた上記の選任方法はこの古い慣習ないし権利を無視するものであり、到底受け入れることができなかった。特にウェールズ内で最も権威ある司教座と自認してきたセント・デイヴィズ教会は早くから王宮の動きを警戒し、策を講じてきた。

まず、1120年代にリギヴァルフ（Rhigyfarch）の『大司教聖デイヴィッド伝（Vita Beati Davidis Archiepiscopi）』によってひとつの伝説がつくられた。すなわち、セント・デイヴィズ教会は聖デイヴィッド以来大司教座であったが、蛮族の攻撃を避けるために一時的にその権威がブルターニュの教会に移され、今日に至っている。したがって、セント・デイヴィズ教会は本来、そして潜在的には現在でも大司教座としての権威をもっている、というのである⁽²⁴⁾。

次に、1144年に司教バーナード（Bernard）がローマ教皇ルキウス（Lucius）に対して、セント・デイヴィズ教会が大司教座であることを確認するよう求め、教皇から調査団を派遣するという約束を得たが、教皇の死去で実現しなかった。そこでバーナードは翌年次の教皇エウゲニウス（Eugenius）に調査団の派遣を再度求め、その際次の点を主張する同教会の手紙を提出している。①セント・デイヴィズ教会は本来大司教座である。②ウェールズの他の司教座教会はかつて同教会の管理下にあった。③カンタベリー大司教のウェールズ教会支配は最近の政治的混乱の中で押しつけられたものであり、歴史に照らして正当性を欠く。

教皇エウゲニウスはセント・デイヴィズ教会の主張を受け止め、本格的な調査をする姿勢を見せた。これを知ったカンタベリー大司教セオボルト（Theobald）は危機感をもち、教皇に手紙を送って、カンタベリー教会がイングランドだけではなくウェールズの教会をも管理するのは正当であると主張した。実際、過去半世紀間ウェールズの司教たちは就任に際してカンタベリー大司教の聖別を受けて忠誠を誓ってきたのであり、バーナード自身も例外ではない、というのである。教皇は双方の主張を聴取して1148年10月に裁定を下すと約束した。こうしてセント・デイヴィズ教会に大司教座権が認められる可能性が生まれたが、裁定が下される前にバーナードが死去したため、この問題は立ち消えになった⁽²⁵⁾。

具体的な成果はなかったが、バーナードの問題提起はセント・デイヴィズ教会内でしっかりと記憶にとどめられ、事件後40年を経たウェールズ巡行の際には教会メンバーに共有されていた。バーナードの後のデイヴィッドやピーターも王宮が作ったルールに従って司教に就任しているが、彼らの下でも教会内に大司教座権を主張する動き、王宮の教会支

配を警戒する動き見られた⁽²⁶⁾。

こうした経緯の中で、歴史上初めてカンタベリー大司教がウェールズをくまなく回り、主要な教会でミサを主宰するのであるから、巡行を危惧する声がセント・デイヴィズ教会内に生まれても不思議ではない。実際に危惧する者がいたことは『ウェールズ旅行記』の次の記述から明らかである。なお、この記述は第1版にはなく、第2版で追加された部分である。

(2-1) リース・アップ・グリフィズはラドノアで大司教とギラルドゥスの説教に感銘を受けて十字軍参加を決意した。

その後リースが本拠地カーディガンにもどると、すぐにセント・デイヴィズ教会の参事会員が面会を求めてやってきた。参事会員は自分の教会の利益を守ることばかり考えて、思いつくすべての理由を挙げて次のように訴えた。「カンタベリー大司教が[これ以上]ウェールズの奥まで巡行すべきではありません。特にウェールズの首席司教座であるセント・デイヴィズ教会に[来るのを許してはいけません]と。さらに、「もし巡行が[この教会にまで]進められるならば、[これが]先例となって、[セント・デイヴィズ教会は]古来の権威と首席[司教座]という名誉ある地位を取り戻すのが将来大変困難になるでしょう」と警告した。

しかし、リースはこの強力な説得に屈しなかった。彼は自分が巡行を阻止すれば、大司教の心をひどく傷つけることをよく理解していたからである⁽²⁷⁾。

この参事会員のように具体的な危惧をもっていたのはウェールズ人の中でも少数派であり、おそらく聖職者に限られていたであろう。しかし、これまでにない形で進められる王権の働きかけに対して、俗人も含めて当時のウェールズ人が何か不安を覚えた可能性は高い。

以上の説明から大司教が主導しての巡行はギラルドゥスが言うほど単純なものではなく、イングランド王権、ウェールズ人支配者の双方が巡行に対してそれぞれ表面に出せない思惑をもっていたことは明らかであろう。

では、ギラルドゥスは巡行についてどのような認識や評価をもっていたのか。これが本節の課題である。

まず、彼が巡行に参加し、一行の案内役を務めた経緯について私は次のように推測している。ウェールズに疎いボードウィンが巡行を率いるのであれば、一行を案内し、補佐する者が必要になる。そして、ウェールズの地誌や政治状況をよく知っていて、巡行先のウェールズ人支配者たちに引き合わせるができるのは、誰よりもまずギラルドゥスであった。実際王が彼を身近に置いていたのはこうした仕事を任せるためであり、実績もあった。また、聖職者である彼が十字軍編成のために力を尽くすのは当然という判断もあった。

ヘンリ二世から見ればギラルドゥスに巡行の案内を命じたのはごく自然であり、彼が熱心に任務を遂行すると期待していた。

次に、ギラルドゥスが十字軍参加に強い意欲をもっていたことは間違いない。彼は巡行が始まるとすぐに十字軍参加を申し出て、他の人々に模範を示し⁽²⁸⁾、翌1189年には大司教ボードウィンとともに聖地に向けて出発した。しかし、彼はフランス滞在中にヘンリ二世の死去を知り、リチャード一世から帰国の命令を受けてすぐにイングランドへもどっている⁽²⁹⁾。他方、大司教は聖地への旅を続けたが、1190年にアッコで捕えられ、そこで死去した⁽³⁰⁾。

自ら聖地に向かったほどであるから、彼は十字軍参加を説く巡行にも真剣に取り組んだ。ウェールズの指導的聖職者として当然なすべき義務と考えていたのであろう。『ウェールズ旅行記』で彼は、自分の説教が聴衆に大きな感銘を与えたと繰り返し語っている。多少の誇張は含まれているだろうが、彼が熱心に勧奨したことは確かである。多くの場合説教が聴衆の理解できないラテン語でなされたことを考えると、彼の熱のこもった口調や身振りが人々に感銘を与えたのではなかろうか。

ギラルドゥスは説教の成果にも大きな関心を示している。『ウェールズ旅行記』は各地域のウェールズ人支配者たちが勧奨に応じて参加申し出をしたかどうか、自分たちをどのように歓待してくれたか、個人名を挙げて紹介している。また、少なくとも勧奨の間では大きな成果があり、勧奨の場に姿を見せなかったひとりを除いて、ウェールズ各地の支配者は皆参加を申し出たこと、唯一の不心得者に対して大司教から破門が宣告され、神罰が下されたことが紹介されている⁽³¹⁾。彼は、ウェールズに住む世俗支配者はみな参加すべきだと考えていた可能性がある。

以上のように、ギラルドゥスが十字軍とその勧奨に真剣に取り組み、尽力しようと考えていたことは間違いない。しかし、彼は何の心配もなく巡行に参加していたわけではない。それは、上記のように巡行が彼個人の思いとは別の政治的意味をもっていて、これを彼はよく知っていたからである。巡行に付随していた政治的意味を彼の立場から再度整理してみよう。

まず、ギラルドゥスは当時王宮にいたのだから、ヘンリ二世がウェールズ支配のために十字軍参加勧奨の巡行を利用しようと考えていることを知っていたはずである⁽³²⁾。直接説明を受けなくても、王がなぜカンタベリー大司教をウェールズに送り込み、司教座教会でミサを行わせようとしているのか考えてみれば、容易に推察できることである。

次に、彼はウェールズ人支配者たち、特にセント・デイヴィズ教会の一部メンバーが王の意図を察知して、(2-1)のように巡行に反対する動きを見せるのではと予想していた可能性が高い。『ウェールズ旅行記』第2部の冒頭で彼はセント・デイヴィズ教会の歴史

をかなり細かく記しており⁽³³⁾、12世紀初頭以来セント・デイヴィズ教会がイングランド王権に抵抗してきた経緯をよく知っていたからである。

巡行の案内役を命じられた時にギラルドゥスが王の意図とこれに対するウェールズ人支配者たちの反発を知っていたとすると、彼は次の2つの点を危惧したであろう。

ひとつはウェールズ人支配者の中に巡行を妨害する者が出てこないかという心配である。反対する動きがあったことは上の(2-1)から明らかである。現実には妨害されることはなかったが、こうした危惧をもっていたから、ギラルドゥスは招集された各地のウェールズ人支配者たちの態度、なかでもミサや説教に対する彼らの態度に注目し、名前を挙げて紹介したのかもしれない。

もうひとつは自分に対するウェールズ人支配者たちの信頼が失われるのではないかという危惧である。1184年以降彼はヘンリ二世の下で王宮とウェールズ人支配者たちとを仲介する役割を果たしていたが、ここでウェールズ教会に対する支配権を確認しようと目論んでいる大司教の巡行を先導すれば、これは彼がウェールズ人側の意向を知りながらあえて無視し、一方的にイングランド王権側に立つことになる。その結果彼がこれまで築いてきたウェールズ人支配者たちとの信頼関係が失われ、敵とみなされる危険性が高い。これまで自分の活動を支えてきた柱のひとつが崩れるわけで、できれば避けたい。私はギラルドゥスがこのような思いをもったと推測する。

しかし、彼は危惧を押し隠してウェールズ各地に大司教を案内し、司教座教会における大司教のミサを支援した。実際問題として彼が巡行の案内役を断ることは不可能であった。十字軍勸奨は指導的立場の聖職者にとって当然なすべき仕事であったし、王の命令でもあった。ウェールズ人支配者たちに対する説得はこれまで経験を積んできた仕事であり、自分のメリットが生かされる場でもあった。彼には王の命令を断る理由が、少なくとも表立って使える理由がなかった。そして、彼がただ命令に従っただけではなく、精力的に働いたことは上で述べた。

以上の判断に大きな過ちがないならば、巡礼参加は彼にとって明白な政治的スタンスの表明であった。彼は巡行の時点ではっきりと王権側に立って見せたのである。

実はこうしたスタンスは『アイルランド地誌』と『アイルランド征服』の執筆時にも見られた。前節で述べたように、この2著作で彼はヘンリ二世の事蹟や人柄を絶賛することで王の愛顧を確保し、自分に対する誤った認識を変えようと努力していた⁽³⁴⁾。王にいわばすり寄っているのである。ただ、この時のスタンスは著作の中で示されているだけで、ウェールズ人支配者たちに直接インパクトを与えるような行動はなかった。彼らに知られずに済む可能性もあった。しかし、今回は人々の面前での行動である。彼はより分かりやすい形で自分のスタンスないし戦略を明示したことになる。

なぜギラルドゥスは危険を覚悟で自分の戦略的スタンスを明らかにしたのか。根底にあった理由は、彼が十字軍参加を聖職者としての義務と認識し、くわえて、王の命令を拒否できない立場に置かれていたことであろう。しかし、より直接的には、巡行参加を断れば王の信頼が失われ、これまでの努力が無に帰すると彼が判断したためではなかろうか。数年前から王の信頼を得る努力してきたギラルドゥスにとって巡行は王に自分の忠誠心を示すよい機会でもあった。彼は王に向けて自分のスタンスを明示し、王の愛顧を得てセント・デイヴィズ司教への途を切り開こうとしたのである。

この点を示唆する記述をひとつ挙げよう。

(2-2) ボードウィンの一行がウェールズ巡行を終えてロンドンへ戻る途上、間もなく行われる十字軍遠征の記録を誰に命じるのがよいかが話題となった。いろいろな人が挙げられる中で、自身の遠征参加を決めていた大司教はギラルドゥスが適任者であるとし、「王が大助祭〔ギラルドゥス〕を推して、より高い地位を与えるように自分は願っている」と述べた⁽³⁵⁾。

これはギラルドゥスが引退した後、巡行よりも10年以上たって執筆を始めた『自叙伝』の文章であるが、事実を伝えていると考えてよい。彼は2ヵ月近く同行して仕えたボードウィンが自分の能力を高く評価してくれたことを喜び、長く記憶していたのであろう。特に、ギラルドゥスの昇進を願うという大司教の発言は彼にとって大きな意味をもっていた。セント・デイヴィズ教会の大助祭であった彼が昇進するとなれば司教就任であり、これは彼が長年熱望しながら、王の誤解ゆえに達成できないでいた生涯の目標であった。もし司教選定に大きな影響力をもつカンタベリー大司教の推挙があれば、自分に対する王の認識も改まる可能性がある。このようにギラルドゥスは考えたのではなかろうか。現実には、セント・デイヴィズ司教の選出が必要になる前にボードウィンは死去し、大司教の高い評価はギラルドゥスの期待する成果を生むことはなかった。

巡行時のギラルドゥスがイングランド王権に近いスタンスをあえてとっていたことは明らかである。

Ⅲ ヘンリ二世に対する評価

本節の課題は、『ウェールズ旅行記』の中でギラルドゥスがヘンリ二世をどのように評価しているか確認し、そこから彼の政治的スタンスを推定することである。

まずギラルドゥスがもっていた主君に対する認識ないし期待を示す記事を2つ挙げる。

一般論の形をとったり、文筆家の立場から発言するといったばかりがかけられているが、『ウェールズ旅行記』執筆時の彼の心境を知る手掛かりとなる。

(3-1)「あなた [= 誰か人] が王宮での昇進を目指すならば、その野心はあなたを強くひきつけ捕えてしまうだろう。」いったん野心に捕えられると、あなたは王宮を離れて活動できなくなってしまう。こうした場合でも、あなたの目標が達成できれば満足が得られるだろう。「しかし、[王宮での] 尽力が実を結ばない場合には、[目標達成を夢みて] 1年、また1年と際限なく無駄な努力が[続けられ]、あなたは資財だけでなく時間まで失うことになる。」その間の活動は誰にも認められずに打ち捨てられるのであって、これが何よりも大きな損失となる⁽³⁶⁾。

(3-2) 私はかつて、文芸に対して僅かな関心しかもたず他の事柄に心を奪われていた2人の君主、すなわち、ヘンリ二世とその息子で[王位] 継承権者であったポアトゥ伯リチャードのために、『アイルランド地誌』と『アイルランド征服』を著しましたが、「いずれも空しく、実を結ばぬ作業に終わりました。」そこで、私はこの著作『ウェールズ旅行記』を窺下、カンタベリー大司教スティーヴン殿に献呈することにしました⁽³⁷⁾。

最初に上の史料がいつ頃書かれたのか確認しておこう。2つの文章ははともに第1序文に含まれているが、前者は第1版の文章であり、後者は第2版で追加された部分である。したがって、(3-1)、(3-2)はそれぞれ2つの版の完成時期である1191年ころと1197年ころにギラルドゥスがもっていた思考や認識を示すと考えてよい。なお、執筆の時期でいえば、第1版に記されている文章は執筆が始まった時、おそらく、1188年後半から、完成した時までの間に書かれ、第2版への追加は第1版完成後から第2版完成時までの間になされたと想定するのが安全である。しかし、ギラルドゥスはそれぞれの文章を含めて第1、第2版を仕上げているのだから、各版完成時の彼の思考や認識がここに示されていると判断してよいだろう。

では、1191年と1197年にギラルドゥスはどのような状況に身を置いていたか、推測を含めて説明しよう。

1191年のギラルドゥスは、ヘンリ二世が1189年に死去した後も請われて王宮にとどまり、リチャード一世に仕えていたが、内心では王宮を去るタイミングをはかっていた可能性が高い。それは、ヘンリ二世の死後リチャード一世からウェールズ、特に南部に広がった軍事的混乱の收拾を命ぜられたが失敗するなど、彼がこれまでのように出自の二元性を生かしてイングランド勢力とウェールズ人勢力との仲介役をつとめるのが難しくなっていたからである。くわえて、ヘンリ二世に続いて、彼が信頼していたカンタベリー大司教ボードウィンも1190年に死去し、王宮で彼の後ろ盾となる人々がまったくいなくなってい

た⁽³⁸⁾。王宮内で自分のメリットを生かす人や機会がなくなれば、彼にとって王宮にとどまる意味はない。

こうした状況を念頭に置いて読むと、(3-1) から次の点を推測してよいであろう。①ギラルドゥスは一般論として宮仕えのいわば罫について述べているが、その内容は1184年以降彼がヘンリ二世のために尽力してきた様子を想起させる。(3-1) は自身の経験を踏まえた記述である可能性が高い。実際、彼は後に書かれた『自叙伝』の中で自分のヘンリ二世に対する献身が認められず、王は空約束をするだけで何の報償もくれなかったと繰り返し嘆いている⁽³⁹⁾。②とすれば、「王宮での昇進」という表現で彼が思い浮かべているのは、自分が王宮付き司祭の地位を経てセント・デイヴィズ司教になることである⁽⁴⁰⁾。③また、「王宮での昇進」を「野心」と言い換えているのは、ヘンリ二世に働きかけて目標を達成するという自分の計画には、「生まれつき頑固で強情な」王の性格を考えると⁽⁴¹⁾、無理があったと感じていたからではなかろうか。④そうした状況のギラルドゥスが王に仕えた年月を振り返りながら、一度野心の罫にかかる1年、また1年と不満が重なるようになるものだと述懐するのも自然である。

以上の私の推測に大きな誤りがないとすれば、彼はこの時点でヘンリ二世の愛顧を得て聖職者としての栄達を図るというこれまでの作戦を諦めて、何か別の計画をつくる必要に迫られていたことになる。自分ではどうしようもない状況変化によって望まぬ転機を迎えたギラルドゥスの苦しい状況が行間から浮かび上がってくる。

1197年のギラルドゥスは王宮を離れた後、セント・デイヴィズ教会の大助祭の職にもどってリンカーンで文筆活動に専念していた。王宮での10年間をかえりみて、次の戦略を練っていた時期である⁽⁴²⁾。(3-2) でギラルドゥスは王宮での苦い経験を、その原因をつくった主君を名指しして語っている。大司教への献呈辞につながる簡潔な文章なので、自著献呈だけが言及されているが、それ以外の王への奉仕も彼の念頭にあった可能性が高い。実際、彼はこれまで2つの著作でヘンリ二世の偉業を称えながら王に対する自分の忠誠心を誇示し、セント・デイヴィズ司教に任命してほしいという願いを王に訴えてきた。(3-2) に彼が期待していたものは記されていないが、単なる褒め言葉や僅かな報償ではなかったはずである。

とすれば、(3-2) でギラルドゥス吐露している不満の内容は(3-1) の述懐と重なることになる。同じことを(3-1) では一般論として、(3-2) ではかつての主君に対する不満として具体的に述べているのである。ともに第三者に向けた言葉となっているが、はっきりとした批判になっているのは後者である。

では、なぜ同じ第1序文の中で直截さの違う表現が出てくるのか。思いつく理由の中で最も説得力のあるのは2つの文章が書かれた時期の差であろう。第1版が完成した時期に

ギラルドゥスは王宮付き司祭としてリチャード一世に仕えていたが、第2版が作られた時にはその職を辞して王宮を離れていた。ともにヘンリ二世の死によって彼が最大の後ろ盾を失った後であるが、それでも王宮付き司祭と単なる聖職の文筆家との差は大きい。いろいろな点で後者の方が自由であり、文章をつづる際の心理的制約が少なかったはずである。(3-1)では王宮に仕える身ゆえに一般論として語るほかなかった王への不満を、(3-2)では王宮を離れた解放感の中で王の名を挙げて具体的に表明したと私は推測する。

第2版も献呈先のリンカーン司教を通じて王宮の人々の目に触れることが当然予想されたから、彼はまったく不安なしに2人の王に対する不満を表明できたのではない。それでもギラルドゥスが(3-2)の文章をあえて追加しているのであって、私はこの点を注目する。イングランド王宮に対する彼の政治的スタンスがはっきり変化し始めたことを示すと考えられるからである。

次に、ギラルドゥスが直接ヘンリ二世を評価している記述を2つのグループに分けて紹介する。

第1のグループは支配者ないし征服者としてヘンリ二世が示した具体的な行動を伝える2つの文章である。ともに王の豪胆ぶりを紹介するエピソードとなっている。

(3-3) セント・デイヴィズ教会のそばを流れる川にセッヒラヴェルの石(Lapide Lechlaver)という橋があり⁽⁴³⁾、近隣の人々の間で、アイルランドを征服したイングランドの王が赤い手をもつ男によって傷を負い、帰国の途上この橋の上で死亡するという預言が伝えられていた。

ヘンリ二世はアイルランド遠征の帰途セント・デイヴィズ教会を訪れたが、その際ウェールズ人の女が王に近寄り司教について苦情を訴えた。王は通訳によって女の訴えを理解したが、無視して通り過ぎようとした。すると女は大声で「語る石 [=セッヒラヴェル] よ、今日 [ここで] 我々の仇を取れ、すべてのウェールズ人のためにこの男に復讐せよと叫んだ。」ヘンリ二世は通訳を通じて彼女がマーリンの預言に言及していると分かったが、ひるむことなく石橋を渡り、また戻ってきた。そして王は側近たちに「マーリンはうそつきだ、もう誰が彼を信じるものかと言った。」そばでこれを聞いていたひとりのウェールズ人が、マーリンの預言は別人のことでありと言いつ返した。王はこれを聞き流してセント・デイヴィズ教会に入り、神の加護を願って祈りをささげた。そして無事にハヴァーフォード城に到着した⁽⁴⁴⁾。

(3-4) ヘンリ二世はアイルランド遠征の帰途、カーディフで英語を話す男から忠告を受けた。男は王に、神の禁じている日曜日の売買をやめさせるよう求め、くわえて、自分の忠告に従えばアイルランド征服は成就するが、従わなければ年内に王の最も愛するものを失うであろうと予言した。しかし、王はこれをたわごととして無視した。

男はすぐに姿を消し、二度と現れなかった。

翌年の四旬節に王は、息子たち3人が反旗をかがげてフランス王と結託するという大きな不幸に見舞われ、以後死ぬまで息子たちに悩まされた。これは王が男の忠告を聞き入れなかったからで、「実際彼は生まれつき頑固で強情であったから、何事でも[気に染まないことに]まったく注意を向けなかった⁽⁴⁵⁾。」

ギラルドゥスが直接巡行と関係のない事件をこれだけ細かく紹介したのは、ヘンリ二世が征服地ウェールズでどのような振る舞いをするか強い関心をもっていたからであろう。自分のいわば本拠地での王の行動は彼が職務を遂行する際の、また、王との良好な関係保持のための重要な手掛かりとなったはずである。

2つの文章について少し説明しよう。

(3-3)のウェールズ人女性の発言は古くからウェールズ人の間で伝えられていた預言を踏まえたもので、現在の政治・軍事的抑圧からの解放を求める人々の願望を表していた。ギラルドゥスはこうした預言に興味をもち、預言を枠組みに使うアイルランド征服の歴史を著述したいと考えるほどであったが、預言そのものは信じていなかった⁽⁴⁶⁾。(3-3)においても彼は決してウェールズ人女性に同調しているのではなく、むしろ預言を無視して石橋を渡って見せたヘンリ二世に身を寄せている。『アイルランド地誌』に見られるような手放しの称賛ではないが、具体的な行動を踏まえての、したがって、より大きな説得力をもつ称賛である。

これに対して、(3-4)でギラルドゥスはヘンリ二世を結果的に批判している。ここでも王は男の忠告を無視し、その限りでは支配者らしい気概を示したように見える。しかし、ギラルドゥスによれば王の行動は大きな誤りであった。無視したのが神の教え、警告だったからである。息子たちの反逆を神罰とするのは強引な理解であるが、聖職者の権力者批判としては自然なものであろう。

第2のグループはヘンリ二世を正面から非難した記述である。こうした明確な批判は先行する2著作には出てこない。ギラルドゥスは、非難すべきと考えたことでも、曖昧な表現で暗示したり、これ以上は控えるといった書き方をしている⁽⁴⁷⁾。直接仕える主君に対する遠慮であろうが、その抑制が『ウェールズ旅行記』ではかなりの程度緩んでいる。

(3-5)大きな権力をもつ世俗の支配者たちが教会財産を取得すると、その財産を浪費したり、傭兵への支払いに充てるといったことが最近しばしば見られる。「これは特に現在イングランドを統治しているヘンリ二世に言えることで、[王は]ほかの大多数の人々よりもこの悪行に溺れている」。そして、[箱に入れた果実の]ひとつが腐ると全体が腐ってしまうように、王の悪行が国中に広がり、大きな災難を生み出している⁽⁴⁸⁾。

(3-6) 最近アベルガヴァニーで発生した暴力沙汰について紹介しよう。城主のラヌルフ・ポアが城下の住民を弾圧し、住民が彼に復讐した事件である。「この事件を引き起こしたのはラヌルフ・ポアであるが、本当の〔責任者である〕扇動者はイングラント王ヘンリ二世であった。」

私は今までこの事件の詳細を語らないほうがよいと考えてきた。それは、細かい事情が明らかになると、ラヌルフ同様に悪しき評判をもつ者がまねる危険があると考えていたからである。……

王はラヌルフの悪行に賛同し、その遂行を命じたのであるが、その後王の死去によって王がどれほど悲しみと混乱の人であったか明らかになった。実は、王が早くから恥ずべき行為をしていたことは、生存中に神罰を受けたことから明らかである。神罰は、上記の事件だけではなく、「王が恐るべき生涯を通じて犯したすべての罪」ゆえに下されたのである⁽⁴⁹⁾。

まず(3-5)について説明しよう。

ギラルドゥスは生涯を通じて俗人の教会財産所有を悪しき慣行ととらえ、改めさせようとしていた。彼が聖職者としてまず取り組んだのは、本来教会に帰属すべき財産や収入源を俗人の支配から取り戻す仕事であった⁽⁵⁰⁾。(3-5)は聖職者として当然の主張であり、ギラルドゥスの読者にとってこれはいわばおなじみのテーマである。

しかし、(3-5)は単に教会財産の俗人所有を批判しているのではなく、この悪しき慣行の出発点ないし手本をヘンリ二世がつくったという点を強調している。王がその統治のために教会の権利を奪うのを見て、他の世俗支配者たちも安心して王にならった、その結果各地の教会、修道院が現在悲しむべき状況に陥っているというのである。

彼は以前から王が俗界だけでなく聖界をも支配下において王国を統治しようとしているのを知っていた。同様に彼は俗人の教会財産所有を許しがたいことと考えていた。しかし、先行2著作では王の政策を広く見られる悪しき慣行と直接結びつけてとりあげ、その点で王を批判することはなかった。王宮の人々から王の政策の根幹部分を批判していると理解されても仕方のない記述が『ウェールズ旅行記』に初めて姿を見させている。

次に、(3-6)の前半は個別事件のいわば黒幕がヘンリ二世だったという指摘ないし主張であり、王の統治を一般的に批判しているわけではない。しかし後半の部分には王が神に罰せられるような恥ずべき行為を重ねていたこと、王の生涯は「恐るべき」ものであったと記されており、全面的かつ否定的な評価が出されている。『アイルランド地誌』や『アイルランド征服』で王の性格、事蹟がほぼ全面的に称賛されているのに比べると⁽⁵¹⁾、『ウェールズ旅行記』のヘンリ評ははっきり違っている。

では、なぜギラルドゥスは『ウェールズ旅行記』で王への評価を変えたのか。ここでも

私はヘンリ二世の死去が大きな理由であった考える。「生存中」の王について語っている(3-6)が王の死後に書かれたことは間違いなく、(3-5)についても同様に判断してよいであろう。あるいは、同書が完成、発表されたのは王の死より2年後だから、上記2つの文章がその時点でギラルドゥスがもっていた判断を表していると考えてもよい。

一般的に従者が主君を批判することは難しいが、特にギラルドゥスの場合は自分の栄達のために王の愛顧を強く求めていたから、ヘンリ二世を生存中に批判することは不可能だった。しかし、ヘンリ二世が死去すると、彼は最大の後ろ盾を失う一方、王に対する配慮ないし遠慮は不要になった。だから、ギラルドゥスははっきりと王を批判するようになったのではなかろうか。

この推測が当たっているならば、ギラルドゥスはヘンリ二世の生存中からその統治方法、特に教会政策について批判し、厳しい評価をしていたが、それを表に出さないよう自制していたことになる。換言すれば、『アイルランド地誌』や『アイルランド征服』に見られるヘンリ二世称賛は彼の評価の一面を誇大に表現したものであり、『ウェールズ旅行記』でようやく彼の真の評価が語られ始めたのである

Ⅳ セント・デイヴィズ大司教座権

『ウェールズ旅行記』の執筆時にギラルドゥスがもっていた政治的スタンスを探るのが本稿の目的であるが、その第3の手掛かりは彼のセント・デイヴィズ教会の歴史と現状に関する記述、特に同教会の大司教座権に言及している部分である。

まずこうした記述からどのような方法で彼の政治的スタンスを推定するのか説明しよう。

先行拙稿で私は彼の著作を発表順に2つ取り上げ、ヘンリ二世に対する評価など共通するテーマについて彼がどのように述べているか比較するという方法をとった。その結果、数年の間で彼の王に対する評価がかなり変化していることが明らかになった。無条件の称賛だったのが、同じ称賛でも批判を含むものへと変化しているのである⁽⁵²⁾。本稿第3節でも同様な検討をして、ヘンリ二世の死去が契機となって王と王宮にたいするギラルドゥスの評価がさらに厳しいものになっているという結論を得た。いずれも時系列に沿った比較、すなわち、先行する記述を基準として後の記述を検討し、その差異から情報を引き出すという方法である。

それに対して本節は逆の方法、すなわち、『ウェールズ旅行記』の発表以後にギラルドゥスが見せた行動を基にして、それと共通する記述、あるいは、その萌芽とみなしうるも

のが同書にないか探すという方法をとる。具体的に言えば、彼は後にイングランド王宮と全面対決し、ローマ教皇の面前で自分とセント・デイヴィズ教会の権利を主張したが、この「セント・デイヴィズ問題」で彼が使っている論理や情報に通じるものが『ウェールズ旅行記』に含まれていないか探し、見つければ、そこから彼の政治的スタンスを推定するのである。幸いなことに、同書には手掛かりとなる記述がかなり多数、しかも、まとまって含まれている。

史料の紹介と検討を始める前に、「セント・デイヴィズ問題」について簡潔に説明しておく必要があるだろう⁽⁵³⁾。

1194年に王宮付き司祭の職を辞したギラルドゥスは数年間著述に専念しており、1198年まで政治的な動きは見せなかった。しかし、この間に彼が次期セント・デイヴィズ司教の選出を待ちながら大胆かつ綿密な計画を練っていたことはまず間違いない。それは、司教選出の手続きが始まると彼が直ちに一連の、今日から見ても思いきった作戦を次々と進めているからである。

まずセント・デイヴィズ教会はギラルドゥスを実質上唯一の司教候補に定め、司教選定権をもつ王に伝えて裁可を得ようとした。しかし、リチャード一世が急死し、後継者ジョンが正式決定を即位後に延期したため裁可は遅れ、しかも、ジョンは最終的にギラルドゥスの司教就任を拒否した。ギラルドゥスは、おそらくこうした事態も予想していたのであろう、王の拒否を知ると直ちに新しい作戦を公表し、教会もこれに従って動き出した。新作戦は2つの主張から構成されていた。ひとつは、ギラルドゥスを唯一の次期司教候補としたセント・デイヴィズ教会の決定は尊重されるべきだという主張、もうひとつは、同教会は本来大司教座であって、この点を確認してほしいという主張である。彼は教会が以前からもっていた願望を自身の司教就任願望と組み合わせ、ローマ教皇インノケンティウス三世に訴え出るという大胆な方法で一挙に実現しようとした。イングランド王宮が自分の司教就任に反対でも、ローマ教皇であればその頭越しに決める権限をもっているはずという論理ないし読みである。セント・デイヴィズ教会の支持をより確実なものにする方策として、また、聖界の優位性をめぐって西ヨーロッパの諸侯との政治的駆け引きに熱心であった教皇を引きつける方策としても巧みな作戦であった。

本節にとって重要なのは、この作戦でギラルドゥスがセント・デイヴィズ教会の宿願を自分の生涯目標にかかわらせている点である。彼は、自分の所属する教会のことであるから、2代前の司教バーナード(Bernard)が大司教座権の回復を求めてローマ教皇に訴え出た経緯を、また、自分の同僚たちの間でこの願望が受け継がれ、生きている状況を知っていた。しかし、そうした知識をもっていることと大司教座権をイングランド王宮に対する武器として使うことははっきり違う。本稿との関係でいえば、前者は彼の政治的スタン

スとは別に存在しうが、後者は政治的スタンスと直結している。とすれば、いつこの切り替えがなされたのか、すなわち、ギラルドゥスがいつ上記の新作戦を立てたのかが重要なポイントとなる。先行拙稿で私は、ギラルドゥスが新作戦を練り始めたのは彼が王宮を離れた1194よりも後で、1198年までには完成していたと推測したが⁽⁵⁴⁾、1194年以前に彼が大司教座権についてまったく考えていなかったかどうか検討しなかった。本節はこの欠落を埋める作業でもある。

ギラルドゥスは『ウェールズ旅行記』第2巻の序文と第1章でセント・デイヴィズ教会を詳しく紹介している⁽⁵⁵⁾。他の教会、たとえば同じ司教座であるサンダフ（Llandaff）教会、バンゴール（Bangor）教会、セント・アザフ（St. Asaff）教会よりもはるかに多くのスペースを使っている。彼が自分の職場であり故郷でもあったセント・デイヴィズ教会に強い関心をもっていたのは当然であるが、それだけでなく、第2巻を書き始めた時の彼は同教会の歴史や現状に特別の関心を寄せていたと私は考える。それは、この時期に彼を取り巻く人的環境が大きく変わり始めていたからである。

上記のように彼は王宮における後ろ盾を、それも、自分の生涯目標であるセント・デイヴィズ司教の選定権をもっていた2人を失っており、新しい王や大司教からすぐに愛顧や信頼を獲得するのは難しかった。同書が発表されたのは1191年であるが、執筆の最終段階で彼は5年あまり進めてきた計画、すなわち、王宮の信頼を得て司教の地位を獲得するという戦略を考え直す必要に迫られていたのである。

では、戦略再検討の手掛かりをどこに求めればよいのか。司教の選定はセント・デイヴィズ教会の推挙、王の任命、カンタベリー大司教の聖別の順に進められ、この3つが要件であったが、後の2つが失われたのであれば、まずは残されたひとつ、教会の支持を固め、これを軸にして戦略を組み直すのが自然である。その準備作業がセント・デイヴィズ教会の歴史と権限の調査であり、成果が『ウェールズ旅行記』に書きこまれたのではないか。彼がいつこの情報を入手したのかははっきりしないが、上記のようなギラルドゥスの状況を踏まえて『ウェールズ旅行記』中のセント・デイヴィズ教会に関する記述を読むことは可能である。

以下第2巻の序文と第1章の内容を順次紹介するが、セント・デイヴィズ教会と直接関係のない記事は除外した。また、第2版や第3版の追加部分で本節が取り上げるべき内容のものはない。したがって、以下はすべて第1版の記述である。

序文は「ここで第2巻が始まる」という文章以外に特別のタイトルがない短い文章である。

(5-1)「メネヴィア（＝セント・デイヴィズ教会）は今日でも確かにウェールズの中心地であるが、かつては大司教〔座がおかれた〕首都であった。」古くから人々の尊

敬を集め、ウェールズ唯一の母教会であったが、今日では過去の栄光に頼っているだけで、かつて保持していた真の力は失われている。これは本当に悲しむべきことである。そこで、大司教の祭服がどのようにしてメネヴィアにもたらされたのか、また、それがどのような事情で持ち去られたのか、さらに、順次誰が大司教になったのか、記すことにしよう⁽⁵⁶⁾。

第1章は「メネヴィアの大司教座とその特筆すべき事柄について」と題されている。分量が多いので、5つに分けて紹介する。

(5-2)「ブリタニアの歴史は、カエルレオンで……当時この地の大司教であった聖ドゥブリキウスがその高貴な職務を……[聖] デイヴィッドに手渡し、その後[聖] デイヴィッドによってメネヴィアへ移されたと伝えている。」セント・デイヴィズはウェールズのはずれに位置し、荒涼とした地域であるが、聖デイヴィッドは世俗から離れた場所を求めてここに大司教座を設けたのである。「彼の生涯について証言している書物が明らかにしているように」、聖デイヴィッドはきわめて敬虔な人で、聖人と呼ばれるにふさわしい生涯を送った⁽⁵⁷⁾。

(5-3)「[聖] デイヴィッドの時から25人の大司教がこの地でセント・デイヴィズ大司教座を受け継いだ」。25代目のサムソン大司教の時に社会が混乱したが、これを避けるために彼は大司教の祭服をもってブルターニュに移住し、空位だったドルの司教に就任した。セント・デイヴィズ教会が大司教座を失ったのは、教会自体の怠慢や貧困もかかわっているが、むしろサクソン族のイングランド侵入によってウェールズ人がそれまで享受していた名誉を完全に奪われたためである。

「ウェールズがイングランド王ヘンリー一世に服従するまでは、ウェールズ[各地の]司教はメネヴィア大司教によって聖別され、大司教自身は[大司教選挙で]彼に投票した人々によって聖別されていた。当然大司教が他の教会への服従を誓う[といった手続き]はまったくなかった。」サムソン以降ヘンリー一世の時代まで19人の大司教がセント・デイヴィズ教会を導いた。

ウェールズがイングランド王権に服従して以降のセント・デイヴィズ司教は、ヘンリー一世時代に就任したバーナード、スティヴン時代のダヴィッド、ヘンリ二世時代のピーターである。「この3人[の司教]は、王から強く求められたからであるが、いずれもカンタベリー[大司教]の聖別を受けている⁽⁵⁸⁾。」

(5-4) ウェールズがイングランド王権に服する前であれ、後であれ、ボードウィン以外にウェールズに足を踏み入れたカンタベリー大司教はひとりもない。ボードウィンは神聖な目的をもってウェールズを訪れ、「住民に自ら十字軍参加を説くために、ウェールズのすべての大聖堂でミサを主宰した。」

「ごく最近のこの日まで、ミネルヴァの司教区がカンタベリー〔大司教〕に服従することは一度もなかった。」この点はベダの著作を見れば明らかである。イングランドの人々を改宗させ、彼らの大司教となったアウグスチヌスの権威をウェールズの司教たちは認めなかった、とベダは述べている。この当時ウェールズには7人の司教がいたが、今は4人しかいない。大聖堂も同様に減少したと思われる⁽⁵⁹⁾。

(5-5) 大司教座を失った後のセント・デイヴィズ教会でバーナードだけが、かつて教会のもっていた権限を復活してくれるようローマ教皇に公に求めた。しかし、この要請は、バーナード自身がカンタベリー大司教に服従の宣誓をしたという大司教側の証言によって阻止され実現しなかった。バーナードは大司教座の回復要請という「恐るべきことをあえて訴え出て、自信をもって突き進んだ」のだが、そうできたのは彼が王に気に入られ、くわえて、当時の社会が平和で豊かだったからである⁽⁶⁰⁾。

(5-6) 今日のカンタベリー教会とセント・デイヴィズ教会とを比較すると、前者が王の支持、大きな財産、司祭たちの支援、文芸や法に通じた人材に恵まれているのに反して、後者にはこれらすべてが欠けており、しかも、嘆かわしい状況を正そうとする意欲も見られない。「いろいろな形で思わぬ時に発生する王国の大変動、あるいは、社会の大変化でも起きない限り、〔セント・デイヴィズ教会がかつての権利を〕取り戻すのは極めて困難であろう⁽⁶¹⁾。」

では、(5-1) から (5-6) から『ウェールズ旅行記』執筆中のギラルドゥスが後の「セント・デイヴィズ問題」につながる構想をどこまでもっていたと言えるであろうか。私の推定を5点に分けて述べよう。

第1に、ギラルドゥスはセント・デイヴィズ教会の歴史や現状をよく知っていた。彼が少年期より同教会に親しく出入りしていたことを考えれば当然であるが、通常の教会メンバーよりも多くの知識、情報をもっていたことは確実であり、さらに、この時期に彼が特別の関心を教会の歴史に向けていたと考えてもよいであろう。

第2に、セント・デイヴィズ教会の大司教座に関する記述が大きな比重を占めている。特に歴史的記述は、かつて同教会にあった大司教座権がなぜ、どのように失われたかを軸に展開されている。彼の関心は大司教座権に集中している。

第3に、セント・デイヴィズ教会の大司教座権は、同教会が本来カンタベリー大司教に服従する必要がなく、その意味で独立した存在であるという認識と組み合わせられている。この主張のために教会の歴史を大司教座権を中心として紹介している可能性がある。また、この主張にとって自分が先導したカンタベリー大司教のウェールズ巡行が不利な効果をもたらすこともよく分かっていた。

第4に、以上3点から推定すると、ギラルドゥスは『ウェールズ旅行記』の発表時まで

にセント・デイヴィズ教会の大司教座権を新しい戦略の要と認識していた可能性が高い。ただし、大司教座権を主張すれば、全ウェールズの教会を支配下に置こうとするイングランド王宮、特にカンタベリー大司教の強い反対にあうことは、バーナードの先例から推定できた。したがって、自分の主張が王宮によって封殺されないための工夫が必要になるが、この点について彼は何も記していない。彼は新戦略を模索する中で壁にぶつかっていたのではなかろうか。

第5に、ギラルドゥスは自分のアイデアを実現しようとするればイングランド王権と正面から戦う必要があり、これは大変な難事であることをよく認識していた。王の愛顧など3つの有利な条件をもっていたバーナードでさえ大司教座権の復興に失敗したのであるから、王の愛顧に期待できない自分が主張しても成功する可能性はどれほどあるのか、といった考えが浮かんだかもしれない。少なくとも彼が消極的な判断に傾くのがむしろ自然な状況である。だから彼は「王国の大変動」や「社会の大変化」でも起きないかぎりセント・デイヴィズ教会がかつての地位を取り戻すのはきわめて困難だろうと記したのである。

V おわりに

前節までの検討結果は次の3点にまとめることができる。

- (1) 大司教ボードウィンがウェールズの主要な教会をすべて訪れてミサや説教を行い、これをウェールズ聖界に対するカンタベリー教会の支配権の証と見なしたが、ギラルドゥスは大司教、したがって、イングランド王宮のこうした意図をよく承知して巡行を先導し、積極的に支えている。彼の行動は、当時のウェールズ聖界の状況から判断して、ウェールズ人支配者たちの反感を招く危険性が高かったが、1188年の彼はあえて親イングランド的なスタンスを明示している。(第2節)
- (2) 先行する『アイルランド地誌』や『アイルランド征服』でギラルドゥスは主君ヘンリ二世を絶賛し、目立った批判をしていないのに対して、『ウェールズ旅行記』では称賛は少なく、むしろ、批判が、それも、具体的な非難が目立っている。巡行を終えた後、同書の執筆・完成の間に彼は王に対する評価をはっきりと変え、それを明示するようになっている。おそらく王の死(1189年)が変化のきっかけになったと考えられる。最大の後ろ盾であったヘンリ二世との距離が拡大する中で、ギラルドゥスの政治的スタンスもまたイングランドから離れていった可能性が高い。(第3節)
- (3) セント・デイヴィズ教会はかねてより大司教座権の復活を求めており、ギラルドゥ

スもこれをよく知っていたが、『ウェールズ旅行記』執筆時の彼はその実現可能性はごく低いと判断し、しかも、宿願達成の成否はイングランド王宮の意向にかかっていると認識していた。したがって、1197年の段階で彼は、同教会を味方につけ、その大司教座権と自らの司教就任をセットにしてローマ教皇に訴え出るという「セント・デイヴィズ問題」の中軸的な作戦をまだ立てていなかった。(第4節)

(1)～(3)に大きな間違いがないとして、ギラルドゥスは1188年から1197年の間に親イングランド的だったスタンスを大きく変えていくが、まだ王宮と正面から対決する準備を整えていなかったことになる。

註

第1節

- (1) [3] Giraldus (Dimock, J. F. (ed.)). [24] Giraldus (Thorpe, L. (trans.)).
- (2) [24] Giraldus (Thorpe, L. (trans.)), pp. 37～39. [30] Bartlett, p. 216.
- (3) [1] Giraldus (Dimock, J. F. (ed.)).
- (4) [2] Giraldus (Dimock, J. F. (ed.)).
- (5) [4] Giraldus (Dimock, J. F. (ed.)).
- (6) [94] 永井, 第4節。 [100] 永井, 第5節。
- (7) [95] 永井, 第3, 第4節。
- (8) [96] 永井, 第4節。
- (9) [24] Giraldus (Thorpe, L. (trans.)), p. 36.
- (10) [101] 永井, 第1節。 [102] 永井, 第1節。
- (11) 本稿第2節の史料(2-1)を参照。
- (12) ギラルドゥスは『アイルランド征服』の自分用の写本をつくって手元に置き、完成後も訂正や追加を重ねていたと推測されており、『ウェールズ旅行記』でも同様であった可能性がある。 [102] 永井, 第2節。 [71] Rooney, pp. 104～107.
- (13) [94] 永井, 第3, 第4節。
- (14) [95] 永井, 第5, 第6節。
- (15) [97] 永井, 第2, 第3節。
- (16) [98] 永井, 第4節。
- (17) [101] 永井, 第4節。 [98] 永井, 第5節。
- (18) [30] Bartlett, p. 216.
- (19) [3] Giraldus (Dimock, J. F. (ed.)), p. xvii.
- (20) [24] Giraldus (Thorpe, L. (trans.)), pp. 45～46, 275～77.

第2節

- (21) [24] Giraldus (Thorpe, L. (trans.)), p. 26.
- (22) [98] 永井, 第3節。
- (23) [98] 永井, 第3節。本稿第4節の史料(4-3)を参照。
- (24) [98] 永井, 第4節。
- (25) [98] 永井, 第3節。本稿第4章の史料(4-5)を参照。

(26)[98] 永井, 第3節。

(27)[3] Giraldus (Dimock, J. F. (ed.)), pp. 15~16. Giraldus (Thorpe, L. (trans.)), pp. 76~77.

・ ・ ・ ・ ut archiepiscopum Cantuariensem, quoniam inauditum hoc hactenus fuerat, ad penitiores Walliarum partes, praecipue sedem Menevensis quae caput est Wallie accedere nullatenus sustineret: si processerit, praepudicium magnum et gravamen in posterum antiquae dignitati suae recuperandae, et metropolitanae sedis honori, posse procul dubio provenire.

(28)[3] Giraldus (Dimock, J. F. (ed.)), p. 14. [24] Giraldus (Thorpe, L. (trans.)), p. 75.

(29)[97] 永井, 第3節。

(30)[24] Giraldus (Thorpe, L. (trans.)), p. 208, n. 445.

(31)[3] Giraldus (Dimock, J. F. (ed.)), p. 144. [24] Giraldus (Thorpe, L. (trans.)), p. 202.

(32)本稿第4節の史料(4-4)を参照。

(33)[3] Giraldus (Dimock, J. F. (ed.)), pp. 101~10. [24] Giraldus (Thorpe, L. (trans.)), pp. 160~69.

(34)[101] 永井, 第4節。 [102] 永井, 第5節。

(35)[5] Giraldus (Brewer, J. S. (ed.)), p. 79. Giraldus (Rutherford, A. (ed. trans.)), p. 57.

Sperabat enim archidiaconum promoverundum a rege pluriam et sublimandum.

第3節

(36)[3] Giraldus (Dimock, J. F. (ed.)), p. 6. [24] Giraldus (Thorpe, L. (trans.)), p. 66.

Hempe si quaestum facis in curia, te tanto fortius allicit et annectit ambitio, non missura cutem, non curiam, nisi plena. Si autem labor in damno est, adhuc tamen annum apponis, et iterum annum annio, et sic in infinitum, ne una cum censu tempora perdidideris, ・ ・ ・ ・

(37)[3] Giraldus (Dimock, J. F. (ed.)), p. 7. [24] Giraldus (Thorpe, L. (trans.)), pp. 67~68.

・ ・ ・ ・ vacuo quondam quoad accessorium illud et infructuoso labore peregi;

(38)[97] 永井, 第3節。

(39)[5] Giraldus (Brewer, J. S. (ed.)), pp. 57, 60 など。 Giraldus (Rutherford, A. (ed. trans.)), pp. 37, 40 など。

(40)この当時王宮付き司祭の職は司教になるステップのひとつと見なされていた。

(41)下の史料(3-4)を参照。

(42)[98] 永井, 第4節。

(43)lechlaver (llech llefaru) はウェールズ語で「話す石」の意。ギラルドゥスはこれに lapide (「石」)を重ねている。

(44)[3] Giraldus (Dimock, J. F. (ed.)), pp. 108~109. [24] Giraldus (Thorpe, L. (trans.)), pp. 166~68.

“Vindica nos hodie, Lechlavar: vindica genus et gentem de homine hoc.”

“Merlino mendaci quis de cetero fidem habeat?”

(45)[3] Giraldus (Dimock, J. F. (ed.)), pp. 64~66. [24] Giraldus (Thorpe, L. (trans.)), pp. 123~25.

Quas tamen omnes animo obstinato, et corde indurato, incorrigibiliter omnino contempsit.

(46)[102] 永井, 第8節。

(47)[102] 永井, 第5節。

(48)[3] Giraldus (Dimock, J. F. (ed.)), p. 22. [24] Giraldus (Thorpe, L. (trans.)), p. 82.

・ ・ ・ ・ praecipue vero Anglorum regem Henricum secundum, nostris diebus regnantem, et

(26)

hoc vitio prae aliis laborantem,

(49) [3] Giraldus (Dimock, J. F. (ed.)), p. 48. [24] Giraldus (Thorpe, L. (trans.)), p. 109.

. . . . vere auctor extiterat Anglorum rex Henricus secundus; vicecomes autem Herefordie, Ranulphus Poerium, machinator.

(50) [97] 永井, 第2節。

(51) [101] 永井, 第4節。 [102] 永井, 第5節。

第4節

(52) [102] 永井, 第5節, 第9節。

(53) [98] 永井, 第4節。

(54) [98] 永井, 第4節。

(55) [3] Giraldus (Dimock, J. F. (ed.)), pp. 101~107. [24] Giraldus (Thorpe, L. (trans.)), pp. 159~68.

(56) [3] Giraldus (Dimock, J. F. (ed.)), p. 101. [24] Giraldus (Thorpe, L. (trans.)), pp. 159~60.

Quoniam igitur caput est Cambriae Menevia, et urbs olim metropolitans,

(57) [3] Giraldus (Dimock, J. F. (ed.)), pp. 101~102. [24] Giraldus (Thorpe, L. (trans.)), pp. 160~61.

Sicut Britanniae referunt historiae, apud urbem Legionem, beatus Dubricius, loci ejusdem tunc temporis archiepiscopus, David cessit honorem: et ex tunc, procurante David, usque Meneviam sedis est translatio

. . . . sicut de vita ipsius testator liber conscriptus,

(58) [3] Giraldus (Dimock, J. F. (ed.)), pp. 102~104. [24] Giraldus (Thorpe, L. (trans.)), pp. 161~64.

Sederunt autem a tempore David, archiepiscopi ibidem viginti quinque.

Semper tamen usque ad plenam, que per Anglorum regem Henricum primum facta est, Cambriae subactionem, episcopi Gualliae et Menevensi antistite sunt consecrati; et ipse similiter ab aliis tamquam suffraganeis est consecratus; nulla penitus aliis ecclesiae facta proffessione vel subjectione.

Qui tres, regio urgente mandato, Catuariae consecrationem susceperunt.

(59) [3] Giraldus (Dimock, J. F. (ed.)), pp. 104~105. [24] Giraldus (Thorpe, L. (trans.)), pp. 164~65.

. . . . in singulis cathedralibus ecclesiis, tamquam investiturae cujusdam signum, missam celebravit.

Adeo autem, ante finales hos dies et tempora novissima, Menevensis ecclesia Cantuariensem nullo subjectionis vincolo respiciebat

(60) [3] Giraldus (Dimock, J. F. (ed.)), pp. 105~106. [24] Giraldus (Thorpe, L. (trans.)), pp. 165~66.

. . . . tam formidabiles tantae causae conflictus confidenter est aggressur

(61) [3] Giraldus (Dimock, J. F. (ed.)), p. 107. [24] Giraldus (Thorpe, L. (trans.)), p. 166.

Quapropter, nisi per regnorum forte mutationes, rerumque vicissitudines magnas, quae variis et inopinatis eventibus accidere solent, difficilis erit recuperatio.

参考文献

I 史料

(A) ギラルドゥスの著作と訳本

- [1] Giraldus Cambrensis: *Topographia Hibernica* (in Dimock, James F. (ed.): *Opera Giraldi Cambrensis*, vol. 5, H. M. S. O., 1867) (『アイルランド地誌』)
- [2] Giraldus Cambrensis: *Expugnatio Hibernica* (in Dimock, James F. (ed.): *Opera Giraldi Cambrensis*, vol. 5, H. M. S. O., 1867) (『アイルランド征服』)
- [3] Giraldus Cambrensis: *Itinerarium Kambriae* (in Dimock, James F. (ed.): *Opera Giraldi Cambrensis*, vol. 6, H. M. S. O., 1868) (『ウェールズ旅行記』)
- [4] Giraldus Cambrensis: *Descriptio Kambriae* (in Dimock, James F. (ed.): *Opera Giraldi Cambrensis*, vol. 6, H. M. S. O., 1868) (『ウェールズ案内』)
- [5] Giraldus Cambrensis: *De Rebus a se Gestis* (in Brewer, J. S. (ed.): *Opera Giraldi Cambrensis*, vol. 1, H. M. S. O., 1861.) (『自叙伝』)
- [6] Giraldus Cambrensis: *Gemma Ecclesiastica* (in Brewer, J. S. (ed.): *Opera Giraldi Cambrensis*, vol. 2, H. M. S. O. 1862)
- [7] Giraldus Cambrensis: *De Principis Instructione* (in Warner, George F. (ed.): *Opera Giraldi Cambrensis*, vol. 8, H. M. S. O. 1891) (『君主の訓育』)
- [8] Giraldus Cambrensis: *Symbolum Electorum* (in Brewer, J. S. (ed.): *Opera Giraldi Cambrensis*, vol. 1, H. M. S. O., 1861)
- [9] Giraldus Cambrensis: *Speculum Ecclesiae* (in Brewer, J. S. (ed.): *Opera Giraldi Cambrensis*, vol. 4, H. M. S. O., 1873)
- [10] Giraldus Cambrensis: *De Jure et Statu Menevensis Ecclesiae, Dialogus* (in Brewer, J. S. (ed.): *Opera Giraldi Cambrensis*, vol. 3, H. M. S. O. 1863) (『セント・デイヴィズ教会の権利と地位』)
- [11] Giraldus Cambrensis: *Vita Sancti Dividis Menevensis Archiepiscopi* (in Brewer, J. S. (ed.): *Opera Giraldi Cambrensis* vol. 3, H. M. S. O., 1863.) (『セント・デイヴィズ教会大司教聖デイヴィッド伝』)
- [12] Giraldus Cambrensis: *De Vita Galfredi Archiepiscopi Eboracensis* (in Brewer, J. S. (ed.): *Opera Giraldi Cambrensis*, vol. 4, H. M. S. O., 1873.) (『ヨーク大司教ジョフレイ伝』)
- [13] Giraldus Cambrensis: *Vita Sancti Ethelberti* (in [8] Giraldus Cambrensis: *Symbolum Electorum*)
- [14] Giraldus Cambrensis: *Vita Sancti Remigii* (in Dimock, James F. (ed.): *Opera Giraldi Cambrensis*, vol. 7, H. M. S. O., 1877)
- [15] Giraldus Cambrensis: *Vita Sancti Hugonis* (in Dimock, James F. (ed.): *Opera Giraldi Cambrensis*, vol. 7, H. M. S. O., 1877)
- [16] Giraldus Cambrensis, (Scott, A. B. & Martin, F. X. (ed., trans.)): *Expugnatio Hibernica, The Conquest of Ireland*, Royal Irish Academy, 1978. (『アイルランド征服』)
- [17] Giraldus Cambrensis (Davies, W. S. (ed.)): *De Invectionibus/The Book of Invectives of Giraldus Cambrensis, Y Cymmrodor*, vol. xxx, 1920. (『論駁』)
- [18] Giraldus Cambrensis (Lefevre, Y. & Huygens, R. B. C. (eds., trans.)): *Speculum Duorum, or a Mirror of Two Men*, University of Wales Press, 1974. (『二人の鑑』)
- [19] Giraldus Cambrensis: *Topography of Ireland* (in Wright, Thomas (ed.), Forester, Thomas & Hoare, Richard Colt (trans.): *The Historical Works of Giraldus Cambrensis*), H. G. Bohn,

1863. (『アイルランド地誌』)
- [20] Gerald of Wales, (O'Meara, John (trans.)): *The History and Topography of Ireland*, Penguin Books, 1951. (『アイルランド地誌』)
- [21] ギラルドゥス・カンブレシス, (有光秀一訳): 『アイルランド地誌』, 青土社, 1996 年。
- [22] Giraldus Cambrensis: The Vaticinal History of the Conquest of Ireland (in Wright, Thomas (ed.), Forester, Thomas & Hoare, Richard Colt (trans.): *The Historical Works of Giraldus Cambrensis*, H. G. Bohn, 1863. (『アイルランド征服』)
- [23] Giraldus Cambrensis: The Itinerary through Wales (in Wright, Thomas (ed.), Foster, Thomas & Hoare, Richard Colt (trans.): *The Historical Works of Giraldus Cambrensis*, H. G. Bohn, 1863) (『ウェールズ旅行記』)
- [24] Giraldus Cambrensis: The Journey through Wales (in Thorpe, Lewis (trans.): *The Journey through Wales and The Description of Wales*, Penguin Books, 1978. (『ウェールズ旅行記』)
- [25] Giraldus Cambrensis: The Description of Wales (in Wright, Thomas (ed.), Foster, Thomas & Hoare, Richard Colt (trans.): *The Historical Works of Giraldus Cambrensis*, H. G. Bohn, 1863) (『ウェールズ案内』)
- [26] Giraldus Cambrensis: The Description of Wales (in Thorpe, Lewis (trans.): *The Journey through Wales and The Description of Wales*, Penguin Books, 1978. (『ウェールズ案内』)
- [27] Giraldus Cambrensis (Rutherford, Anne (ed., trans.)): *"I, Giraldus", The Autobiography of Giraldus Cambrensis (1145~1223)*, Rhwymbooks, 2002. (『自叙伝』)
- [28] Giraldus Cambrensis (Bartlett, Robert (ed., trans.): *Instruction for a Ruler, De Principis Instructione*, Clarendon press, 2018. (『君主の訓育』)

II 研究文献

- [29] Babcock, Robert Sherburne: Rule and Society in South-West Wales, 1079~1197, 1992, Doctorial Dissertation submitted to University of California, Santa Barbara.
- [30] Bartlett, Robert: *Gerald of Wales, 1146~1223*, Clarendon Press, 1982.
- [31] Bartlett, Robert: Heartland and Border, the Mental and Physical Geography of Medieval Europe (in [64])
- [32] Brooke, Christopher N. L. : The Archbishops of St. David's, Llandaff and Caerleon on Usk. (in [33])
- [33] Brooke, Christopher N. L. : *The Church and the Welsh Border in the Central Middle Ages*, The Boydell Press, 1986.
- [34] Charles-Edwards, T. M. : Seven Bishop-Houses of Dyfed, *Bulletin of the Board of Celtic Studies*, vol. 24-2, 1971.
- [35] Clarke, Henry William: *A History of the Church of Wales*, Swan Sonnenschein, 1896.
- [36] Davies, J. Conway: Giraldus Cambernsis and Powys, *Montgomeryshire Collections*, vol. 49, 1945/46.
- [37] Davies, J. Reuben: Aspects of Church Reform in Wales, c. 1093~c. 1223, *Anglo-Norman Studies*, vol. 30, 2007.
- [38] Davies, R. R. : *Conquest, Coexistence, and Change. Wales 1063~1415*, University of Wales Press, 1987.
- [39] De Hirsch-Davies, John Edwin: *A Popular History of the Church in Wales, from the Beginning to the Present Day*, Isaac Pitman, 1912.

- [40] Edmonds, Alfred George: *Landmarks in the History of the Welsh Church*, John Murray, 1912.
- [41] Edward, Fiona & Russell, Paul (eds.): *Tome, Studies in Medieval Celtic History and Law, in honour of Thomas Charles-Edwards*, Boydell Press, 2011.
- [42] Evans, H. Wyn: The Bishops of St. David's from Bernard to Bec. (in [83])
- [43] Evans, J. Wyn & Wooding, Jonathan M. (eds.): *St. David of Wales, Cult, Church and Nation*, Boydell Press, 2007.
- [44] Evans, J. Wyn: Transition and Survival, St. David and St. David's Cathedral. (in [43])
- [45] Henley, George & McMullen, A. Joseph (eds.): *Gerald of Wales, New Perspectives on a Medieval Writer and Critic*, University of Wales Press, 2018.
- [46] Henley, George & McMullen, A. Joseph: Gerald of Wales, Interpretation and Innovation in Medieval Britain. (in [45])
- [47] Holmes, Urban T.: The Kambriae Descriptio of Gerald the Welshman, *Medievalia et Humanistica*, new series, vol. I, 1970.
- [48] Hughes, Herbert: Giraldus de Barri: An Early Ambassador for Wales, *Brycheihiog*, vol. XXXVIII, 2006.
- [49] Hurlock, Kathryn: *Wales and the Crusades, c 1095~1291*, University of Wales Press, 2011.
- [50] Isaac, G. R.: The Cult of St. David. (in [43]).
- [51] Jones, Thomas: *Gerallt Gymro, Gerald The Welshman*, University of Wales Press, 1947.
- [52] Jones, Thomas: Gerald the Welshman's "Itinerary through Wales" and "Description of Wales", *The National Library of Wales Journal*, vol. VI, no. 3, 1950.
- [53] Kightly, Charles: *A Mirror of Medieval Wales, Gerald of Wales and his Journey of 1188*. Cadw, 1988. (和訳書 [91])
- [54] King, David & Kenyon, John: The Castles of Pembrokeshire. (in [83]).
- [55] Lieberman, Max: *The March of Wales, 1067~1300, A Borderland of Medieval Britain*, University of Wales Press, 2008.
- [56] Lloyd, John Edward: *A History of Wales, from the Earliest Times to the Edwardian Conquest*, 2 vols., Longmans, Green, 1912.
- [57] Marsden, Richard: Gerald of Wales and Competing Interpretations of the Welsh Middle Ages, c. 1860~1910. *The Welsh History Review*, vol. 25, no. 3, 2011.
- [58] Miles, John: *Gerald of Wales, Giraldus Cambrensis*, Gomer Press, 1974.
- [59] Newell, E. J.: *A History of the Welsh Church to the Dissolution of the Monasteries*, Elliot Stock, 1895.
- [60] Owen, Henry: *Gerald the Welshman*, David Nutt, 1904.
- [61] Owen, W. Jones & Walker, David (eds.): *Links with the Past, Swansea and Brecon Historical Essays*, Christopher Davies, 1974.
- [62] Pitts, David: *The Early Medieval Church in Wales*, History Press, 2009.
- [63] Pryce, Huw: In Search of Medieval Society: Deheubarth in the Writings of Gerald of Wales, *The Welsh History Review*, vol. 13, no. 3, 1987.
- [64] Pryce, H. & Watts, J. (eds.): *Power and Identity in the Middle Ages, Essays in Memory of Rees Davies*, Oxford University Press, 2007.
- [65] Pryce, Huw: Gerald of Wales and the Descriptio Kambriae. (in [41])
- [66] Rees, J. F.: *Studies in Welsh History, Collected Papers, Lectures, and Reviews*, University of

- Wales Press, 1965.
- [67] Rees, William: *An Historical Atlas of Wales from Early to Modern Times*, Faber & Faber, 1959.
- [68] Rhys, John & Brynmor-Jones, David: *The Welsh People, Chapters on their Origin, History and Laws, Language, Literature and Characteristics*, Haskell House Publishers, 1906.
- [69] Richter, Michael: *Giraldus Cambrensis, the Growth of the Welsh Nation*, Aberystwyth, 1972.
- [70] Richter, Michael: Gerald of Wales: A Reassessment on the 750 th Anniversary of his Death, *Traditio*, vol. 29, 1973.
- [71] Rooney, Catherine: The Early Manuscripts of Gerald of Wales. (in [45])
- [72] Sharpe, Richard: What Text is Rhigyfarch' s Life of St. David? (in [43])
- [73] Sharpe, Richard & Davies, John Reuben: Rhigyfarch' s Life of St. David. (in [43])
- [74] Skinner, Patricia (ed.): *The Welsh and the Medieval World, Travel, Migration and Exile*. University of Wales Press, 2048.
- [75] Stephenson, David: *Medieval Powys, Kingdom, Principality and Lordships, 1132~1293*, Boydell Press, 2016.
- [76] Stephens, Meic (ed.): *The New Companion to the Literature of Wales*, University of Wales Press, 1988.
- [77] Turvey, Roger: *The Lord Rhys, Prince of Deheubarth*, Gomer, 1997.
- [78] Turvey, Roger: *The Welsh Princes, 1063~1283*, Longman, 2002.
- [79] Wada, Yoko: Gerald on Gerald, Self-Presentaion by Giraldus Cambrensis, *Anglo-Norman Studies*, vol. 20, 1998.
- [80] Walker, David: Gerald of Wales, Archdeacon of Brecon. (in [61])
- [81] Walker, David (ed.): *A History of the Church in Wales*, Church in Wales Publications, 1976. (和訳書 [90])
- [82] Walker, David: Gerald of Wales, *Brycheiniog*, vol. XVIII, 1978-79.
- [83] Walker, R. F. (ed.): *Pembrokeshire County History*, vol. II, Pembrokeshire Historical Society, 2002.
- [84] Walker, R. F.: The Earls of Pembroke, 1138~1379. (in [83])
- [85] Williams, A. H.: *An Intoroduction to the History of Wales*, 2 vols., University of Wales Press, 1941 & 1948.
- [86] Williams, C. H.: Giraldus Cambrensis and Wales, *Journal of the Historical society of the Church in Wales*, no. 2, 1947.
- [87] Williams, Glanmor: The Tradition of St. David' s in Wales. (in [61])
- [88] Wooding, Jonathan M.: The Figure of David. (in [46])
- [89] 有光秀行『中世ブリテン諸島史－ネイション意識の諸相』刀水書房, 2013 年。
- [90] D. ウォーカー (編) (木下智雄 (訳))『ウェールズ教会史』, 教文館, 2009 年。
- [91] C. カイトリー (和田葉子 (訳))『中世ウェールズをゆく－ジェラルド・オヴ・ウェールズ 1188 年の旅』, 関西大学出版部, 1999 年。
- [92] 永井一郎「ノルマン侵入後のウェールズ－独立をかけた戦い」(青山吉信 編著『世界歴史大系 イギリス史 I 先史～中世』, 山川出版社, 1991 年)。
- [93] 永井一郎「『父祖の土地』－初期中世ウェールズの土地認識」, 『国学院経済学』第 44 巻 1 号,

1995年。

- [94] 永井一郎『『ウェールズ案内』におけるギラルドゥス・カンブレシスの二元性』、『国学院経済学』第57巻3・4号，2009年。
- [95] 永井一郎「ギラルドゥス・カンブレシスと12世紀南ウェールズの政治世界（Ⅰ），（Ⅱ）」『国学院経済学』第59巻1号，2010年，第59巻2号，2011年。
- [96] 永井一郎「ギラルドゥス・カンブレシスの自己認識とウェールズ評価（Ⅰ），（Ⅱ）」『国学院経済学』第59巻3・4号，2011年，第60巻2号，2012年。
- [97] 永井一郎「ギラルドゥス・カンブレシスのキャリア・デザイン（Ⅰ），（Ⅱ）」『国学院経済学』第62巻2号，2014年。第62巻3号，2014年。
- [98] 永井一郎「ギラルドゥス・カンブレシスとセント・デイヴィズ問題（Ⅰ），（Ⅱ），（Ⅲ）」『国学院経済学』第63巻1号，2014年，第63巻3・4号，2015年，第64巻1号，2015年。
- [99] 永井一郎「ギラルドゥス・カンブレシスと『ブレコン大助祭問題』（Ⅰ），（Ⅱ）」『国学院経済学』第64巻2号，2015年，第64巻3号，2016年。
- [100] 永井一郎『『ウェールズ案内』を読み直すー著者ギラルドゥスの執筆意図を手がかりに（Ⅰ），（Ⅱ）』『国学院経済学』第65巻1号，2016年，第65巻2号，2017年。
- [101] 永井一郎『『アイルランド地誌』を読むーギラルドゥス・カンブレシスの執筆意図にかかわらせて』『国学院経済学』第66巻2号，2017年。
- [102] 永井一郎『『アイルランド征服』を読むーギラルドゥス・カンブレシスの執筆意図とかかわらせて（Ⅰ），（Ⅱ）』『国学院経済学』第67巻1号，2018年，2号，2019年。